

軍事行動分類指針：唐代初期史料における用語定義と解釈基準

1. 序論：史料解釈における軍事用語定義の戦略的重要性

史料解釈において、軍事用語の峻別は単なる語彙の整理に留まらず、当時の軍事戦略、政治的意図、および勢力間の力学を正確に把握するための基盤である。唐代初期という、新興の唐王朝が群雄や辺境勢力と対峙した激動期において、史官が特定の語を選択した背景には、明確な「筆法（しゅび）」、すなわち正統性の有無を峻別する政治的意図が介在している。

- **用語選択の背景分析：** 本指針が扱う「寇（こう）す」「攻（せ）む」「侵（お）かす」といった語彙は、単なる物理的行動の描写ではない。例えば、唐の正統性を認めない外部勢力に対して「寇」を用いることで、その行動を「略奪を目的とした賊徒の侵入」と定義し、対する唐側の行動を「討（う）つ（正統な討伐）」と位置づける戦略的意義がある。用語の選択は、そのまま当時の政治的・地理的な勢力地図を反映している。
- **本指針の適用範囲：** 本指針は、州・県単位の広域侵攻から、城門や宮殿の特定部位の突破といった局所的戦闘、さらには「攻具」を用いた組織的な攻城戦までを網羅し、その実態を判定するための基準を提供する。次節では、境界の越境と正統性の欠如を象徴する「寇す」の動態を分析する。

2. 「寇す（こうす／あたこうす）」：領土侵犯と略奪の動態

「寇す」は、唐の版図における「境界（ボーダー）」を、異民族や群雄がいかに攪乱したかを記述する基幹用語である。この語は空間的な侵入だけでなく、対象の政治的地位を貶めるニュアンスを強く内包する。

概念の定義と地理的コンテキスト

「寇す」の主体は突厥、稽胡、あるいは梁師都、劉武周といった辺境割拠勢力である。提供された地図情報を参照すれば、その主戦場は長安の北西、オルドス地方（靈州・延州）から河西回廊（涼州）にかけての辺境地帯に集中している。これらの「線（境界）」を越えて、唐の統治秩序を乱す行為が「寇」と定義される。

「寇」の多層的ニュアンスの分析

1. **略奪目的の行動：** 占領よりも物資・人員の獲得に重点が置かれる。突厥の莫賀咄設（ばくがとつせつ）が涼州を「寇」し、男女数千人を掠（かす）めて去った事例が示す通り、侵入の結果として「掠（りやく）」が伴うのが典型的である。
2. **偵察・試行的行動：** 本格侵攻前の戦力測定機能を指す。武徳二年の黄蛇嶺（こうだれい）において、齊王・李元吉が車騎將軍・張達に「歩卒百人」を率いさせ、「寇を試（こころ）みしむ（嘗みしむ）」と命じた事例は極めて重要である。この無謀な偵察的略奪は、百人全員が没するという悲劇を招き、張達の「忿恨（ふんこん）」を生んで楡次（ゆじ）の陥落を招いた。「So What?（歴史的意義）」として、不適切な「寇」の強要が、最前線指揮官の離反という致命的な結果をもたらしたことが読み取れる。

3. **政治的示威・隠蔽行動**： 王世充が新安を「寇」した事例では、対外的には「攻取」の姿勢を見せつつ、内部では禅譲（篡奪）の相談を進めていた。史官がここで「寇」を選択したのは、彼の軍事行動を政治的野心を覆い隠すための「賊徒の振る舞い」として描き、その正統性を否定するためである。次節では、広域への侵入から、特定拠点の物理的破壊へと焦点を移した「攻む」の論理を解説する。

3. 「攻む（せむ）」：拠点陥落と物理的奪取の論理

「攻む」は、城郭、要塞、あるいは特定の「門」を標的とした、物理的な制圧プロセスを指す。これは「寇」が示す広域的な攪乱とは対照的に、特定の「点」に対する組織的な軍事行動である。

対象の特定化と攻城戦の具体相

「攻む」の対象は、毗陵（びりょう）、丹楊（たんよう）といった都市、あるいは「太陽門」「含嘉門」といった具体的地点に限定される。

- **長期包囲と攻具**： 宇文文化及が魏州を攻めた際、「四旬（40日間）」を経ても勝てなかった例は、「攻む」という行為が「攻具（衝車や梯子）」の準備と、それを打ち破るための持久戦を内包していることを示している。
- **重要地点の突破**： 王世充が洛陽の宮廷門（紫微宮門など）を力づくで制圧しようとする際の語用は、拠点の物理的掌握が直接的に政權奪取（クーデター）に直結していた実態を物語る。次節では、正面攻撃である「攻む」に対し、不意打ちや略奪に特化した他の用語との比較検討を行う。

4. 攻撃形態と掠奪行為の細分的分類

「寇」と「攻」の主軸以外に存在する用語を、戦術的性質に基づき体系化する。

戦術的差異：攻・襲・奄至・掩撃

用語, 性質, 具体的な場面・タクティカル・ニュアンス, 史料上の事例

攻む, 正面攻撃・包囲, 城郭への力攻め。40日間の包囲や「攻具」の使用。 , 宇文文化及の魏州攻撃、李神通の聊城包囲

襲う, 奇襲・不意打ち, 夜間、黎明、背後。敵の油断を突き、電撃的に奪取する。 , 王世充による含嘉門への夜襲（三鼓）、羅士信の硖石堡襲撃

奄至す, 電撃的到着, 予告なく、あるいは突然の到着による攻撃。 , 夏県への奄至（えんし）

掩撃す, 背後・不意の打撃, 敵の背後を襲う、あるいは準備が整う前に叩く。 , 段徳操が梁師都の後ろを掩撃（えんげき）

「So What?」の抽出： 「襲う」や「掩撃す」が選択される際、それは指揮官の機動力や戦術的柔軟性を強調するだけでなく、敵側の「不備」や「油断」を浮き彫りにする意図がある。

「寇す」vs「抄掠」の概念的峻別

1. **プロセスの「寇」と結果の「抄掠**： 「寇」が領土への侵入という進軍の総体を指すのに対し、「抄掠（抄す・掠む）」は物資獲得という結果に焦点がある。

2. **経済的側面：** 劉蘭成が北海の城外で行った事例では、ターゲットは「雑畜（家畜）」や「樵牧者（薪拾いや羊飼い）」であり、「抄者（略奪者）」が米、野菜、道具を背負って（負担して）持ち帰る様子が具体的に描かれている。これは、軍事行動が当時の生存戦略（経済的略奪）と不可分であったことを示している。

補足用語の定義

- **討つ（正統性）：** 官軍が賊を「討伐」する。大義名分を伴う。
- **撃つ（打撃）：** 直接的な交戦・打撃。
- **逼る（圧力）：** 拠点や門に肉薄し、物理的・心理的圧力をかける。
- **徇ふ（となふ）：** 各地を巡り、帰順させ平定するプロセス。

5. 結論：史料解釈における一貫した判断基準

本指針を統合し、未知の記述から実態を判定するための意思決定マトリクスを提示する。

- **ステップ1：主体の正統性と場所の判定**
 - 主体は唐の命（マンドート）を奉じているか？ → 否なら「寇」、然なら「討」。
 - 活動地は辺境（靈州・涼州等）か？ → 「寇」による攪乱と略奪。
- **ステップ2：対象の形態判定**
 - 州・県・地域全体か？ → 侵入・攪乱（寇・侵）。
 - 城・門・砦などの特定拠点か？ → 奪取・陥落（攻・襲）。
- **ステップ3：戦術的属性の判定**
 - 夜間、背後、あるいは「備えざるを突く」か？ → 奇襲（襲・掩撃）。
 - 攻具を用い、四旬にわたる包囲か？ → 正面攻撃（攻）。
 - 雑畜や米・野菜を奪い去るか？ → 略奪（抄・掠）。

本指針の価値

正確な語彙理解は、当時の勢力地図（長安を中心とした中心部と、北方・西方の「寇」が頻出する辺境部）を復元するための不可欠なツールである。「寇」が辺境の脅威を記述するのに対し、「攻」「襲」が洛陽や宮廷門といった権力の中枢（コア）で頻出することは、唐王朝の地理的な安全保障構造をそのまま映し出している。史料の背後にある「書かれざる戦略」——それが単なる境界での腹いせ的な「抄掠」なのか、それとも王朝の存亡をかけた組織的な「攻城」なのかを、これら厳密な用語定義から読み解かれない。